



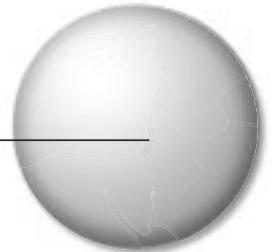
イスラエルからパレスチナ西岸のラマラに行く際に必ず通らなければならないイスラエルの検問所の一つであるカランディア検問所のすぐ横に巡らされた分離壁。左はイスラエル側の監視塔

FIELD SKETCH

「平和と繁栄」の「舞台」を造る JICAのサムライたち

中東和平問題の原点とも言うべきパレスチナの地を初めて踏むことは緊張を伴う旅であった。3月、パレスチナ自治区でイスラム原理主義組織ハマスと穏健派ファタハによる統一政府は発足したものの、ガザ地区における両派の厳しい対立はイスラエルとの関係改善にも暗い影を落としていた。しかし、そこで見たものは、複雑な国際政治の中で翻弄されるパレスチナとイスラエルの間でコミュニティ開発と信頼感を深めることで、「平和と繁栄」のためのプラットホームを建設するというJICAのサムライたちの夢と決意だった。

文 = 尾崎 美千生 (ジャーナリスト)
text by Ozaki Michio
写真 = 今村 健志朗
photos by Imamura Kenshiro



パレスチナ
PALESTINE

ジェリコ市に入るためのイスラエル側の検問所を過ぎるとすぐにJICAパレスチナ事務所が作った看板が見えてくる。奥に見えるのはパレスチナ側の検問所

中東和平プラットホームの柱となる技術協力

出発前の3月初旬、現場感覚を少しでも知っておこうと、東京で上映中の「パラダイス・ナウ」(ハニ・アブ・アサド監督)を観た。ゴールデングローブ賞最優秀外国語作品賞を受賞したこの映画は、パレスチナ北部の村ナブルスに住む2人の青年が自爆攻撃への決意を固めるまでの葛藤を扱っていた。「平等に生きられなくとも、平等に死ぬことはできる」という主人公のセリフが胸を衝いた。

所が置かれているテルアビブに着き、本部から派遣された「母子保健に焦点を当てたリプロダクティブヘルス向上プロジェクト」(以下母子保健プロジェクト)の評価調査団と合流した。事務所からプロジェクト担当の三好浩樹・企画調査員が説明役についてくれた。

翌日、プロジェクトの活動基地であるジェリコに向かう防弾車の車窓からは、イスラエルがヨルダン川西岸地域に張り巡らした分離壁や有刺鉄線が嫌でも飛び込んだ。時々、小高い丘の上には緑色の瀟洒な家並みが見える。「あれはイスラエル人の入植地です」と三好が説明する。検問所では



JICAの支援で新しく作られた廃棄物埋め立て場。福岡方式と呼ばれる廃棄物の埋め立て技術が取り入れられている

スチナ自治区のヨルダン川西岸で2005年以来進めている技術協力、「母子保健プロジェクト」「ジェリコ及びヨルダン渓谷における廃棄物管理能力向上プロジェクト」「地方行政制度の改善プロジェクト」について、メディアを通じて状況報告をすることである。だが、これらのプロジェクトが今後本格化する農業開発や観光開発プロジェクトを含めて、「中東和平のプラットホーム(舞台)造り」(成瀬猛所長)を支える「柱」に当たることが次第に分かってきた。日本政府やJICAが一歩前に踏み出した「平和構築」の土台づくりはパレスチナのコミュニケーションに日本の信頼という苗を植え付ける仕事から始まっていた。

私たちが最初に会ったパレスチナ人はジェリコ市内でJICAに委託された日本人コンサルタント3人を交えて、なにやら真剣に打ち合わせをする10数人の男女だった。コンサルタントの一人に聞いたら、JICAの支援でごみの処理場はできたが、将来の費用負担を誰がどう担うかをめぐるやりとりだった。「なせ、初めてのことで共通利益のために費用をどう負担するかのシステムがありませんからね」と百家争鳴気味の評定にも、「郷に入るとは郷に従え」とばかり日本人が割って入る気配はなかった。ODAも、現地住民を巻き込む作業には大いなる忍耐が要るのだな、というのが正直な第一印象だった。

住民を巻き込むJICAの支援



テルアビブからジェリコに通じる幹線道路沿いに連なる分離壁。写真右上の屋根はイスラエル入植地に立つ家々。壁を隔てて左側にはパレスチナ人の家も見える

母子保健プロジェクトの萩原明子・チーフアドバイザー、山崎健治・業務調整員、津田加奈子・ジュニア専門員らが年明け以来周到な



無料診療デーに訪れた親子に母子手帳について説明するスタッフと萩原明子専門家。萩原さんが着ているのはPR用のTシャツ。Tシャツには母と子が手をつなぎハートを形作ったロゴデザインと「健康な母と子」というコピーが印刷されている

準備を進め、イベント前日には泊まり込みで設営と集客に走り回った。

分離壁や厳しい検問で自由な往来が制限されている住民にとっては、戦後日本の母子の健康改善に大きな貢献をした「母子健康手帳」をモデルに初めて作られた「アラビア語版」が、産前産後の検診や子どもの成長歴をしっかり記録する「命のパスポート」として母親たちのハートをつかんでいた。紙芝居方式の「フリップチャート」も女性の地位向上に貴重な学習機会となった。

160万人の難民を抱え、人口の3分の2が1日2ドル以下の暮らしを強いられている



JICアラマラフィールドオフィスで、3月17日の無料診療デーで配布される予定の母子保健プロジェクトPR用のTシャツの出来栄を見るスタッフたち。左からガーダさん、山崎専門家、飯田春海・中間評価調査団員、ディマさん、三好企画調査員

パレスチナ人の妊産婦死亡率、乳幼児死亡率は高く、

妊婦の30%以上、乳児の40%が貧血で、人口増加率も高い。だが今後はアジアやアフリカの極貧層に比べ、相対的に上昇しつつある健康指標をさらに

高めるための動機付けが課題になる。

「0%から60%に水準を上げることに

比べ、70%以上をさらに上昇させること

とのほうが難しい」といわれるこの世界のことである。

「地方行政制度の改善プロジェクト」の専門家として年毎にパレスチナに来た黒田一敬には、「とうとう念願の地にやって来た」という感慨がある。国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)に参加して以来15年、東ティモールの選挙支援にも携わった。この間、カンボジアでは親しかつた中田厚仁さんを銃弾で失い、東ティモールで仕えた上司はその後ハ

政治と開発のシナジー効果を

イスラエル南部の塩湖「死海」と、ユダヤ人ゆかりの世界遺産「マサダ城」を見学したときには、岩崎昭宏所員に案内されたJICA Aの観光プロジェクト形成調査団と合流した。観光客は同地における紛争や和平の動きに敏感に反応するという。同地に豊富な文化遺産や遺跡などの観光資源の開発も、中東和平へ

のプラットフォームを支える大きな柱の一つになる可能性を持っているだろう。

エルサレムの聖地巡りは季節外れの霰が打ちつける寒い日であった。「東洋からの異教徒の侵入に、神の怒りか」などとジョークを飛ばしながら着いた聖地には、ユダヤ教の「嘆きの壁」、イスラム教の黄金に輝く「岩のドーム」、キリスト教の「聖墳墓教会」が仲良く立ち並んでいた。今度は正気で、信仰厚き人々が一神教なるがゆえになぜお互いに殺し合いまでしなければならぬのだらうかと改めて思った。昨年京都に平和を求めて宗派を超えた宗教家たちが集った「世界平和宗教者会議」(WCRP)が想起起こされた。

私たちのパレスチナ訪問とすれ違いに東京では、昨年小泉前首相が打ち上げた「平和と繁栄のための回廊」構想に関する第1回「4者協議」と、第3回目の「信頼醸成会議」が開かれていた。同構想はイスラエル、パレスチナ、ヨルダンが日本のODAを活用してヨルダン渓谷に農業生産加工団地を造り、いずれはヨルダンを經由して湾岸諸国との経済圏をつくり出すアイデアだ。開発先行で中東和平を牽引しようという日本が世界に発した外交メッセージである。

日本での信頼醸成会議に出席していた成瀬所長が私たちの帰国間際にパレスチナに戻っ



無料診療デーでは、母子手帳のワークショップも開かれた。ワークショップの合間に子どもをあやすJICA帰国研修員で看護師のシハムさん。手にしているのはプロモーション用の母子手帳だ

てきた。「今こそ

JICAがこれまで中東に投資してきた人間と事業のネットワーク、貴重なアセット(財産)を回収すべき好機。ただ私たちは直接的な平和の建設者ではなく、関係国がその上で平和を話し合うプラットフォームの建設者だ。

政治と開発がよきシナジー効果(相乗作用)を發揮してくれることに期待したい」と若いピースビルダーたちを率いる現場監督の言は熱かった。

防弾車で走り回った1週間はあつという間に過ぎた。忙しい視察日程を終えたある日の夕方、強いにわか雨の後に美しい虹が中天に懸かった。今村健志朗・カメラマンと私は夢中でシャッターを切り続けた。虹はどこから始まり、どこへ届いたのか。パレスチナもイスラエルもヨルダンも、いずれの国境も超えた大きな虹に思われた。(敬称略)



ジフトリックUNRWA学校正面玄関前で無料診療デーイベントの飾り付けをするJICA帰国研修員と共催NGOのスタッフたち